關聯するかといつた根本的な問題、資本主義社會の特質に關する問題等が案外簡單に片付けられ、地域の現象の忠實なる記載、地人的把握に終りすぎているのではないかこの點方法論的立場を主として考えれば、さきの歴史的な立場を比較的重視した青鹿氏の著書よりもはるかに拔き出たとはいゝえないようにも考えられる。しかし地理學徒にとつて先ず何よりも必要なことは着實なる地域調査であるとするならば、この廣汎な問題を包括する日本の農業を地理學的に研究要約したものとしてこの地味な研究は充分推賞さるべき學究の書であるといわねばならない。終戰後いたずらにかけ聲のみ大きく、努力のすくない書物が續出する折から本書のもつ價値は極めて大であるといわねばならない。（昭和二十四年古今書院發行、定價六五〇圓）

—（藤岡謙二郎）—

細野重雄著

アメリカ農業の機械化

（農業綜合研究所研究叢書第六號）

東畑精一博士を所長として、戰後、農林省に新に開設された農業綜合研究所は、國内或は世界の農業全般に關するさまざまの問題をとり上げ、その研究業績を機關誌「農業綜合研究」及び「研究叢書」に公表したえず活潑な活動を續けて來ている。こゝに紹介した著書も、所員細野重雄氏によつて「研究叢書」の一つとして刊行されたものであり、本文一八二頁と、別に多くの統計資料が卷末に附加されている。近時わが國に於ては農業の生産力を高めるために農業機械化の問題が盛んにとなえられ、現に一部の農村には農業機械の若干普及化したところもみられる。しかしアメリカの如き高度に資本集約的な經營の行われる農業と、わが國の如き極度に勞働集約的な零細小農經營の行われる農業との間には、直接比較し難い多くのものを持つているため、アメリカの機械化農業に多く學ぶところはあるにしても、その儘わが國にそれを移植しがたいことはもちろんのことである。從つてそれには、アメリカの機械化農業に就ての多くの角度から研究が望まれるのであつて、單に技術的な面からばかりでなく、機械化を通じて示されているアメリカ農業の本質を、國民經濟的關聯の下に於て把握することが必要である。然るにこの方面に就ての研究は、これまでわが國に於ては殆どかえりみられなかつた有樣であつたが、こゝに細野氏のすぐれた勞作に接し、その全貌をうかゞい得るに至つたことはまことによろこばしいことゝ云わねばならない。

細野氏はアメリカ農業の最も主要な特徴をもつてその莫大な生産力にありとし、生産力の發達は農業機械化の進展を意味する。それ故に「農業機械化の過程を檢討しこれが農業經營を如何に變貌せしめ、生産力を如何に昂揚せしめ、農業の生産構造を如何に變革せしめたかということを把握することは、アメリカ農業の生産力の最も重要なる契機を分析することゝなる」との企

圖にの下に、論著を四章にち、先す第一章に於ては農業機械の發展過程を取扱い、第二章以下では、農業機械化が農業及び農村に及ぼした影響と農業機械化に工業が及ぼした影響に就いてアメリカの豊富な統計資料を基礎にして綿密な分析を行つている。

こゝにその一つ一つに亘つての紹介を試みることは、紙幅の關係から許されないが、二、三の點を引用するならば、アメリカの農業も植民時代當初は全くの手勞働であり、後に若干畜力の利用をみたにしても、農業技術は東洋の技術水準と異るところはなかつたのである。然るにアメリカの經濟力は獨立戰爭を經て次第に發達し、イギリスに遲れること約半世紀、十九世紀初頭にはアメリカにも産業革命が始められ、それに應じて農業機械化の發足をみたのであるが、更に南北戰爭以後に於けるアメリカの資本主義の急速な發展に伴い、南北戰爭から第一次大戰までの六十年間は、專ら畜力によつて牽引或は回轉される作業機の發展普及が行われた時代である。次で第一次大戰以後の現在に於ては、前期の畜力に代つて新に機械力が登場し、その主要な特徴は動力機であり、就中トラクター及びトラックを以て代表されるトラクタリゼーションの時代に入つたのである。

このような農業機械のすばらしい發達が農業に及ぼした影響としては、農業機械がしばしば勞働節約機械と呼ばれるように、先す農業投下勞働の節約、從つてそれは農業生産費の低下を齎したのであつて、この點に於て、わが國の農業の集約化が勞力增投の方向に向けられているのに對し、アメリカでは勞力節減の方向に向けられていると云い得るであろう。また農業の機械化は農業生産高を著しく增大せしめた。もちろん農業生産高の增加は、機械化の進展に伴う耕地の擴張によつても起るが、他方、農業生産高を支配する勞働の生産力が機械化によつて高められるのみならず、トラクタリゼーションの段階に於ては、農業の機械化は土地生産力の增進をも導くからである。

しかし農業と工業とを比較するならば、農業自體に於ては機械化によつて飛躍的な變化がみられたのであるが、農業の機械化は農業機械工業の發展なくしては不可能であつた。のみならず、農業の機械化による生産力の增大も、工業のそれに比するならば遙に劣つて居り、また農業生産高は向上し、農業生産物が低落することによつて不利を蒙るのは農業者である。これらの點からみても、農業は工業に比して劣勢産業たらざるを得ないのであつて、工業は主動的地位に於てますます農業を支配するに至るであろう。

このような農業に對する工業の價値は、人口構成に於ても反映し、農業人口は相對的にも絶對的にも減少し、農村人口の減少、都市の增加となつてあらわれているばかりでなく、農業の機械化は農村の階層分化を齎した。農村の階層分化を生ぜしめる原因はもちろん複雜であるが、農業機械に限つて云うならば、農業機械は本來機械の性質として、大規模經營に適するものであり、またそれによつて生産力を高めることが出來る。然るに農業機械が進歩するほど、一定の資本がなければ購入し難いことゝなる

から、資産の乏しい農民は、機械化された大農場經營者との競爭に勝ち得ないことは當然であり、貧しい小作勞働者に轉落せざるを得ないのであつて、かくしてアメリカでは機械化を通じて大經營がふえ、土地の集中がますます行われることゝなる。

以上に於て細野氏の論旨の一端を不充分ながら紹介したのであるが、要するにアメリカ農業は機械化によつて尨大な生産力を獲得し、國民にあり餘る食糧と原料を供給した。しかし前述の如く、トラクターを裝備し得ない農家は全農家の三分の二に達し、これに對して最高の機械力を有し、さらに全雇傭勞働者の四分の一を使役して大量の生産物を市場に供給する「工場農場」さえ存在する。このような大農場になれば、機械力を充分利用して生産費を低下せしめ、農産物價格の下落に對抗することが出來るが、小農は生産力と需要の不均衡に苦しめられつゝも、他産業に就職の機會を見出し得ないために農業に止り、農村の階層分化は機械化の進展に伴つて却つて加速化されている。こゝにアメリカ農業に於ける資本主義化の典型的な事例を見出し得るのである。

（織田武雄）

田中耕太郎「ラテン・アメリカ史概説」

田中耕太郎氏の「ラテン・アメリカ史概説」上下二卷をよんで感じたことを少しかき綴つてみたいとおもう。

氏はこの書を「啓蒙的な入門書」といつているが、「ラテン・アメリカ紀行」（昭和十五年刊）以來約十年をかけた勞作であるだけに單なる入門書以上のもので、西洋史をまなぶものゝ一度は熟讀すべき書である。ただ限られた分量に充實した内容がもられているので、決してよみやすい書であるとはいえない。そして從來の概説書によくみられたことでもあり、またラテン・アメリカ史の性格上やむを得ないことでもあろうが、氏の概説も主として政治史である。歴史の他の側面、經濟・社會・文化などは政治に附隨してふれられている感が深い。（宗教だけはやゝ詳しい。）また附録の「ラテン・アメリカに對する佛蘭西文化の影響」は文化の面を補つているが、主題の關係上叙述が偏つている。

氏の叙述は精確公正で、氏の立場も本文では餘り表面にでていない。だが序にのべられていることを頭において氏のアクセントに注意しながらよむと、氏の立場がかなりはつきりうかびあがつてくる。つまり氏は、歴史から「最も適切な教訓を汲み取」（上・序・三）ろうとしている。氏は、人民の政治的訓練の缺如という點ではラテン・アメリカも我が國も餘りちがわないとされ（上・序・五）、從つてラテン・アメリカ史の研究が「日本の政治の改善及び文化の向上に何等かの意味で役立つに違いないと云う確信」（上・序・六）をもつている。そして帝制下のブラジルが他の諸共和國より「遥によく國内的秩序を保ち、平和と繁榮を享受した」（上・序・四）といゝこれが「我が國に於ける天皇制の存在理由の理論的基礎付けに役立つ」（上・序・四）とのべている。

さて植民地時代で田中氏が重視するのは